

1689年ネルチンスク会議

—— ロ清両国の国境交渉 ——

松 浦 茂

はじめに

- 1 清のアルバジン領有化と自由往来・自由貿易
—— ネルチンスク会議の前半
- 2 内陸部の国境線とその起源
—— ネルチンスク会議の後半
- 3 ネルチンスク条約で定めた国境と両国の解釈
おわりに

は じ め に

1689年にロシアと清朝はネルチンスクで講和会議を開きネルチンスク条約を締結した。その中で両国はアムール地方の国境を画定して、この地域で10年近く続いた戦争状態を終わらせた。ネルチンスク条約はそれから百年以上東アジアに安定をもたらした歴史的な事件である。

ネルチンスク会議が開催された当時は、アムール地方に関する地理知識は両国ともに十分なものではなかったが、協議を重ねて最終的には合意となり条約の締結に至った。ところが後年ネルチンスク条約で決定された国境の内容に不満を持つロシア人の中から、その一般的な理解に疑義を差し挟み独自の解釈を試みるものが現れた。それ以来多くの研究者がこの論争に加わったが有効な反論はできず、国境の位置は混沌としたままである。

このような状況に至った理由としては、まず初めに第一次資料が不足してい

たことがあげられる。そのために両国の代表がネルチンスク会議でいかなる協議を行なったのか、十分な説明ができなかった。会議とは直接関係のない第三者の証言や会議で使用された地図の真偽を論証することが、研究の主要なテーマとなっていた。しかしこれらの資料は第一次資料とはいえないし信憑性も定かではない。ところが20世紀前半になって新しい第一次資料が公刊されて、両国の国境交渉を精密に検討することが可能となった。

次には従来の研究者が、この問題について清の当事者がどのように考えていたのか検討しなかったことである。清が行なったアムール地方統治の実態がほとんど分からなかったからである。しかし今世紀に入り新しい研究が現れて、清代におけるアムール地方の歴史が明らかになるとともに、清が1690年に実施した国境調査が解明され、ネルチンスク会議の当事者たちが理解していた国境の位置が明確になった⁽¹⁾。今後のネルチンスク条約の研究はその成果に拠らなければならない。

本稿においてわたしは、ネルチンスク会議の国境交渉を第一次資料にもとづいて忠実にあとづける。とくに両国の代表がいかなる点で対立して、それをどのように解決したのか、合意した内容の問題点は何かを明らかにする。さらにネルチンスク条約で決定された口清両国の国境が、その後いかに取り扱われたのか、両国の理解がいかに変化したのかを振り返ることにする。

なお本稿においては、ロシア語史料の日付はユリウス暦を用い、清側の史料の日付は旧暦を使用する。〔 〕内にはそれぞれ対応する日付を記入した。

(1) 拙著『清朝のアムール政策と少数民族』（京都、2006年）第1章、The Qing Surveys of the Left Bank of the Amur after the Conclusion of the Treaty of Nerchinsk, *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*, 68, 2010; Qing Rule of the Amur Region, 『アジア史学論集』第8号, 2014.

1 清のアルバジン領有化と自由往来・自由貿易

—— ネルチンスク会議の前半

周知のように清朝の太祖は周辺の勢力を従え、本拠地の近くに移住させて八旗に組織した。太宗が松花江下流・アムール川中流地方に勢力を伸ばしたときにも、その住民を国の中心部に移したが、ただ住民の一部は現住地に留めてクロテンの毛皮を貢納させた。これが後の辺民組織の起源である。清はそれからアムール川の下流方面に進出をはかるが、自らが行動を起こすことはなく、アムール川中流地方の先住民を使って、かれらが下流に交易に行くとき下流の住民を説得して清に従うように働きかけを行なわせた。順治10年(1653)以降にアムール川下流の住民があいついで清に従ったのは、その結果である。こうして清の勢力はアムール下流の沿岸から河口へ、さらには北岸の支流、ゴリュン川とアムゲン川の沿岸にまで広がった。順治帝は従えた住民を辺民に組織して、この地域を本土や東北地方とは異なる支配体制に置いた⁽²⁾。それに対してアムール川の上流地方においてはロシア人との衝突を避けて、先住民の多くをアムール川の南岸地域に避難させたので、北岸地域からは住民の姿が消えたのであった。

ときを同じくしてロシア人もアムール川の流域に現れた。かれらは初めアムール川を往来するだけで、その沿岸に恒久的な拠点を設けることはしなかった。ところが1658年にエニセイスクの軍司令官バシュコーフはシルカ川(アムール川の上流)の北岸にネルチンスクを建設して、この地方における最初の拠点とした。65年にはイリムスクから逃げてきたコサックや農民らが、ネルチンスクよりさらに下流のアムール川東岸にアルバジン寨を築いた。かれ

(2) 拙稿「ヌルハチ(清・太祖)の徙民政策」(『東洋学報』第67巻第3・4号, 1986年)第1章, および拙著, 第4章と第7章を参照。また The Economic Activities of Native Inhabitants of the Middle Amur Region in the Seventeenth Century, 『アジア史学論集』第5号, 2012.

らに続いて多数の農民が入植し、ネルチンスクからアルバジンまでのアムール川沿岸には集落が次々と生まれた。アルバジン地区はもともと肥沃な土地であったので、この後農業が発展してネルチンスクなどに食糧を供給するまでになった⁽³⁾。他方オホーツク沿岸では先住民のツングースが激しく抵抗したので、ロシア人がウダ川にウツコイ（ウツキー）寨を築いたのは80年前後のことである⁽⁴⁾。以上の地点を結んだ線が、70年代におけるロシアの南限であった。

南の清領と北のロシア領に挟まれたゼヤ川、ブレヤ川、およびトゥグル川の沿岸には、どちらにも属さない先住民が居住していた。70年代末になると、ロシア人はアルバジンからこの中間地帯に進出し各地に寨を築いた。さらに81年にはアルゲン川の南岸にアルゲンスキーを建てた。この時期にロシア人が建設した寨の位置はゼヤ川とアルゲン川の沿岸に限られ、清が実効支配する地域には及んでいなかった。ところが1682年になるとアルバジンのコサックらがブレヤ川からゴリユン川に出て、それからアムゲン川の流域に入り、現地の住民からクロテンのヤサク（毛皮税）を徴収するようになった⁽⁵⁾。このときコサックらがヤサクを徴収した先住民の中には清の辺民も含まれていた。

清はこの事態に危機感を強めて、ロシアとの戦争を覚悟した。84年に清軍はロシア人を追ってアムゲン川を北上し、その北にあるトゥグル川の流域に

(3) В. В. Сухих, О местоположении памятников археологии XVII в. в верхнем течении Амура и Зеи, *Известия Сибирского отделения АН СССР*, 1976, 1-1; В. А. Александров, *Россия на дальневосточных рубежах (вторая половина XVII в.)*, Москва, 1969, pp. 29-32; А. Р. Артемьев, *Города и остроги Забайкалья и Приамурья во второй половине XVII-XVIII вв.*, Владивосток, 1999, pp. 105-107.

(4) А. А. Бродников, О событиях на Тугуре в 1684 году (из истории русско-тунгусских отношений в Нижнем Приамурье), *Вопросы социально-политической истории Сибири (XVII-XX вв.)*, Новосибирск, 1999, pp. 3-7.

(5) *Дополнения к актам историческим*, том 9, СПб. 1875, No. 104, p. 215; том 10, СПб. 1867, No. 67, p. 230. (以下 *ДАИ* と省略する); E. G. Ravenstein, *The Russians on the Amur*, London, 1861, pp. 43-44; Бродников, op. cit., pp. 7-8.

入ってトゥグルスキー寨を焼き払い、さらにアンバ=ヒンガン=ダバガンまで達した⁽⁶⁾。翌 85 年にはアルバジンを攻撃して、数日間のうちに降伏させた。こゝまでは清軍の完勝であった。しかしこれで油断をしたのか清軍は最後の詰めを欠いて、畑の作物を焼き払わずに撤退してしまった。それを知りロシア人は作物を収穫しにもどり、もとのアルバジンの地に新しい寨を建て直した⁽⁷⁾。翌年清は再度攻撃をしかけたがそれを奪回することはできず、ずるずると包囲を続けるしかなかった。ちょうどそのときロシア政府の派遣した使者が皇帝の返書をもって北京に到着したので、両国の停戦が実現して、国境の画定を協議する会議を開催することが決まった。

1689 年 8 月にネルチンスクで口清両国の講和会議が始まった。清の代表は領待衛内大臣ソングトゥ、都統・公佟国綱、黒龍江將軍サブスラであった。これに対してロシア側の代表は全権大使のゴロヴィーンで、それにネルチンスク軍司令官ヴラソフなどが加わった。会議の進行は前後半二つに分けることができる。まず前半は 8 月 9 日から 22 日までで、両国が国境に関して合意するまでである。史料を見るかぎり、両国の協議はアムール川沿岸の国境の西半分に集中しているが、実際にはゴルビツァ川の水源からオホーツク海までの内陸部についても合意したとみられる。後半は後者に関する認識の違いが表面化し流会の危機に直面するが、何とか合意してネルチンスク条約の締結にこぎつけた。日付でいえば 23 日から 29 日の間である⁽⁸⁾。

さてネルチンスク会議に関する第一次資料としては、これまで清側の通訳を務めたイェズス会士のジェルビヨンの手記が公表されていたにすぎない⁽⁹⁾。ところが 20 世紀後半になり、ゴロヴィーンの大使日誌とジェルビヨンの同僚で

(6) 『黒龍江將軍衙門檔案』（黒龍江省檔案館所蔵）第 1 冊，康熙 23 年 8 月 18 日の条。わたしは中国第一歴史檔案館においてそのマイクロフィルムを利用した。

(7) *ДАИ*, том 10, No. 67, pp. 252-254; том 12, СПб. 1872, No. 12, pp. 111-114.

(8) この節の日付はゴロヴィーンの大使日誌による。*Русско-китайские отношения в XVII веке*, том 2, Москва, 1972. (以下 PKO と省略)

(9) J. B. du Halde, *Description géographique, historique, chronologique, politique, et physique de l'Empire de la Chine et de la Tartarie Chinoise*, vol. 4, Paris, 1735. に含まれる。(Description と省略)

あったペレイラの手記が公刊されたので⁽¹⁰⁾、史料状況は大幅に改善された。これらの史料の間には日付にずれがあり、内容にも微妙な差違があるが、わたしは相違は相違として、内容に矛盾がない限りそれを問題視しないことにする。それらを比較検討することで、より正確な理解に達することの方が重要である。ただしどれかひとつを中心にしなければ記述はできないので、本稿では内容が最も詳細なゴロヴィーンの大使日誌にもとづいて話しを進めるが、同時にイエズス会士の手記も参照して交渉の内容を掘り下げることにする。

実質的な討議の始まった8月12日の会議において、清の代表がロシアの全権大使と永遠に不変の平和条約について、自らは清皇帝のために協議したいと思うので、ロシアの大使はロシア皇帝のために和平の協議を行ない、友好的に領土を画定するようにと表明したのに対して、ゴロヴィーンは和平の協議と領土の画定のために、ロシア皇帝から派遣されたと応じた⁽¹¹⁾。それから会議はいきなりそれぞれが考える国境を提案しあうという展開になった。本来であればゴロヴィーンは訓令に従って、貿易などの問題を追加してもよかったはずであるが、かれは何も述べなかった。それらの点については、機会を見て協議するつもりだったのであろう。

会議が始まった当初は、両国ともに現実性のない土地を自らの領土だといって、たがいのようすを探った。たとえば清はアムール地方はアレクサンダー大王の昔から中国領であったといい、ロシア側もアムール川以北をロシア領であると主張した⁽¹²⁾。ここまではどちらも予定通りであって、それがそのまま実現するとは考えもしなかったであろう。翌13日からは双方が相手の出方をみながら少しずつ譲歩するようになった。ロシアはアムール川からブレヤ川に、ついでブレヤ川からゼヤ川へと国境をより上流の川に移した。他方清はシルカ川の北岸はネルチンスク、南岸はオノン川を国境とする案を提出した⁽¹³⁾。ロシア

(10) *PKO*, XVII, 2, および J. Sebes, *The Jesuits and the Sino-Russian Treaty of Nerchinsk* (1689), Rome, 1961.

(11) *PKO*, XVII, 2, pp. 510-511.

(12) *PKO*, XVII, 2, pp. 511.

(13) *PKO*, XVII, 2, pp. 516-518.

側がいちはやく中立地帯の分割という現実路線にかじを切ったのに対して、清側はあくまでもロシア領の割譲を求めることに固執した。

両国の大使がテーブルを挟んで対面したのはこの日までで、14日からは両方の通訳が往来して交渉を続行した。清側はイエズス会士のペレイラとジェルビヨン、ロシア側はペロボツコイ（ペロボツキー）とヴァシリコフである。前日の案ではロシアが納得しないのみをみて、清は15日に改めて北岸ではネルチンスクよりさらに下流、シルカ側に注ぐチョルナヤ川を国境としたいと提案した。そしてそれ以上は譲歩しないと念を押した⁽¹⁴⁾。

8月16日になり清がまた一歩譲歩して、チョルナヤ川のすぐ下流にあり、北からシルカ川に流入するゴルピツァ川を国境にしたいと提案した。ロシア側は清の提案を認めれば、アルバジンとアルグンスキー寨を同時に失うことになるので、それに難色を示した⁽¹⁵⁾。18日にロシア側はさらに譲歩して、アルバジンに国境を引く案を提案した。このロシア案に対して、清側はアルバジンにはもともと清の民が居住していた、そこにロシアの民が入ったのは最近のことで、それ以来かれらは力づくで支配を進めたといつて反対した。ここで清はロシアからさらなる譲歩を引き出すために、シルカ川南岸の国境をオノン川からアルゲン川に変更する大幅な修正案を提出した。そしてアルバジンは清に譲り住民はロシア領に移す、アルグンスキー寨も南岸から撤去する、さらにアルゲン川北岸の支流（ガジムル川？）までとその河口にはロシア人は居住させず、清側も国境付近に人びとを入植させない、もしもロシア人がアルゲン川の河口に入植すれば、清もチョルナヤ川に建物をつくると述べた⁽¹⁶⁾。

清が国境をオノン川から一気に川下のアルゲン川に移したのは、理由がある。康熙帝は康熙27年にロシアとの交渉にセレンギンスクに向かうソングトウに対して、ロシアとの間ではネルチンスクまでを清領とすることを指示したが、翌年ネルチンスク会議の直前になってハードルを下げ、ロシアがそれを

(14) *PKO*, XVII, 2, pp. 524-526.

(15) *PKO*, XVII, 2, p. 527.

(16) *PKO*, XVII, 2, pp. 530-531.

認めないときはアルゲン川を国境としても良いと方針を変更した⁽¹⁷⁾。ソングトウらは協議の進行を見て、アルゲン川以外の河川ではロシア側を説得できないと判断したのであろう。

ネルチンスク会議は、ここで前半最大の山場にさしかかる。アルバジンとどちらが領有するかという攻防である。ロシアにとってアルバジンはアムール地方の農業中心地となっており、そこで生産される穀物はこの地域を治める上で欠かせなかった。他方、清にとってはアルバジンは辺民統治の脅威となっており、それを取り除くためにはどうしてもロシア人をアルバジンから遠ざける必要があった。

このとき清軍が不穏な動きをみせる。兵士が陣地を空にして山の上へ移動し、それから全員が甲冑を着てネルチンスクの町に迫った。会議の行きづまりに業を煮やした清が強硬手段に訴えたのである。『八旗通志初集』巻153、郎談伝によると、康熙28年7月10日〔1689年8月14日〕夜中に清兵は示威行動を起こしてそれが功を奏し、翌日ロシア側は清の提案に歩み寄ったと自賛する。これが現在は通説として定着している。こうした見解は清の軍事力がロシアのそれを圧倒していたという予断にもとづいており、それが真実ではないことはアルバジン戦争の結末をみれば明らかである。

ゴロヴィーンの大使日誌によると、ロシアが清軍の異変を感じたのは8月20日である。ゴロヴィーンはすぐにペロボツコイらに指示して清側の様子を探らせるとともに、見張りのものにも情報を収集させた。このときかれは清の真意を測りあぐねていた。このような行為は世界の慣行に反するものであり、ロシアは戦争を辞さないと抗議し、翌日には寨の周囲に柵と壕を作り、万一に備え自ら兵士を率いて柵の外に待機した⁽¹⁸⁾。ここでジェルビヨンの手記を参照すると、清の代表は国際法に反するこのような賭にでることに逡巡しており、もしもそれが失敗に終わったときに、罪が自身に及ぶことを恐れて、康熙帝の信任が厚いイエズス会士から何としても同意を取りつけようとしたという。同

(17) 『清実録』康熙27年5月癸酉、および28年4月壬辰の条。

(18) *PKO*, XVII, 2, pp. 532-537.

僚のペレイラもほぼ同一の感想を述べている⁽¹⁹⁾。さらにペレイラは、ロシアは初め清軍の動きを帰り支度とみていたという⁽²⁰⁾。ロシア側に緊張感が走ったことは事実であるが、恐怖感や悲壯感が漂ったようすは感じ取れない。

このような状況でも両国は交渉を続けた。ゴロヴィーンによると、21日にロシアはアルゲン川を国境とし、アルゲンスキーのロシア人は北岸には移さないという案を提出した。それを聞いて清の代表は新たな提案を行なう。ゴルビツァ川とアルゲン川を国境とし、アルゲン川は大ガジムル川（アルゲン川南岸の支流という）が流入する地点までとする、なおアルゲンスキー寨は撤去して清の大使が望む場所に移し、ロシア側はそれ以上アルゲン川に入植しないというものだった⁽²¹⁾。翌22日にゴロヴィーンは再びペロポツコイを送って、ロシア皇帝の意志を聞かずにそれに返答することはできないと述べた。しかし清の代表はそれに納得せずロシア側に新たな提案をするように迫ったので、ペロポツコイはゴロヴィーンが事前に指示した通り、アルバジンよりやや川上のオデコン川（オールドコン川）、アムール川、アルゲン川を国境とし、さらにアルゲン川の水源地とされるダライ湖からダライ湖に流入するケルレン川まで国境を延長し、アルバジンには双方ともに入植せず狩猟もしないという案を提出した。しかし清の代表はオデコン川を国境とすることも、ダライ湖まで国境を延長することも認めなかった。そしてアルゲン川沿岸とシルカ川沿岸にはロシア側は建物を作らず、アルゲンスキーは撤去してネルチンスク近くに移すことを主張した⁽²²⁾。ゴロヴィーンはそれ以上清が譲歩することはないと判断し、ついにゴルビツァ川案を受け入れる決断をした。このときアルゲン川に沿って上流のどこまでを国境としたのか、ゴロヴィーンの大使日誌には明確にされていない。

ゴロヴィーンは清の提案を受け入れた理由について、次の点をあげる。その直前にブラーツク（ブリヤート）とオンコツのヤサク納貢民がロシアから清に寝返ったことを知り、ツングースの納貢民がロシア皇帝を裏切ることや、さら

(19) Du Halde, *Description*, vol. 4, pp. 195-196; Sebes, op. cit., pp. 251, 253.

(20) Sebes, op. cit., p. 249.

(21) *PKO*, XVII, 2, pp. 534-537.

(22) *PKO*, XVII, 2, pp. 543-544.

には清と結託してダウル地方（アルバジンを含む地域）を荒らしたり、バイカル湖周辺のヤサク納貢民を清側に誘導することを恐れたためであった。さらに清側が態度を硬化させ戦争の準備を始めたことも、ロシア側に妥結を急がせたという。これらの政治的な理由とともに、ゴロヴィーンはまたアルグン川流域を版図に加えることの経済的な意義も考慮していた。続けていう。ダウル地方のロシア人に聞くと、アルバジンとゴルビツァ川の間には入植に適した土地が少なく、クロテンなどの狩猟は行われていなかった。またアルグン川北岸にはアルグン川から1日（ネルチンスクからは12日）のところ銀鉞山があるうえに、塩湖や耕作地が多くアルバジンより入植に適していた⁽²³⁾。以上からゴロヴィーンは、アルバジンを譲ってもアルグン川の北岸地域でそれを十分に補えると考えたのである。

それまでの協議において清は、ロシアがアルバジンとその周辺を放棄しないならば、協議してもむだであると繰り返したのに対して、ゴロヴィーンは清はかつてロシアに多大な損害を与えたので、それを償うには領土で譲歩するのが当然だと反論した⁽²⁴⁾。こうした論法からいけば、仮にロシアがアルバジンを譲るならば、それに見合う補償を清から引き出したはずである。ところがアルグン川流域はすでにロシアの勢力圏に入っていたので、ここでそれを確保できたとしても現状維持に止まる。わたしはそれに加えて、ロシアが清から自由貿易の言質をえたことが、アルバジン地域を放棄する理由になったと考える。両国はこれまで貿易に関してほとんど協議をしなかった。会議で貿易の話が出てきたのは20日のことで、ロシア側からであった。この日ゴロヴィーンはペロポツコイとヴァシリコフを遣わして、アルバジンを国境とすべきことを清側に提案した。そして今後両国の間で争いや戦いが起こらないように、友情を育むことができるように、アルバジンには双方ともに現在も将来も兵は入植させない、今ある建物はこわす、と述べて、「それによりこのように堅実な条約ができれば、両国の臣民の間には友情と愛情が生まれ、貿易は両方に利益を生み、すべ

(23) *PKO*, XVII, 2, pp. 544-545.

(24) Sebes, op. cit., p. 247; *PKO*, XVII, 2, pp. 523-526.

てがうまくいく」と結んだ⁽²⁵⁾。これがきっかけとなったのだろう、翌 21 日に清の代表はペロポツコイらに対して、アルバジンは絶対にロシアには譲らないと断言した後、帰り際に次の如く言った。

清の大使はかれらに次の如く託したという。永久に平和となって、それにより両方の側に利益のある貿易活動を行なうようになって、かれらの商人はいかなる理由があってもモスクワ国には行かないが、もしも永久に平和となれば、やってくる偉大な君主（ロシア）の商人に対して、かれらのハン（清皇帝）は自由に取引をするように命令するだろう、と⁽²⁶⁾。

つまり講和条約を締結したら、ロシア商人に自由貿易を許可すると約束したのである。ロシアが貿易の問題を持ち出すことは、康熙帝もあらかじめ予想していた。かれはセレンギンスクでの会議に出発するソングトゥに対して、ロシアがネルチンスクより下流の土地を放棄し、ガンチムールらを清に返還して講和条約を締結するときには、貿易を許可してもよいと語っている⁽²⁷⁾。貿易の許可は、会議の前から織りこみずみだった。

その後の協議において清の代表は、貿易に関しては皇帝に上奏するので、そのことを条約文の中に書くことはしないとか、それを条約文に書き入れることは屈辱であると主張し、草案の段階では一切記さなかった。ロシア側はそれに納得せず、自らの草案には必ず貿易の項目を設け、条約文においてそれを明文化することを要求した。その対立は大詰めまで続き、最終的には 8 月 28 日にイエズス会士が間に入り、それを条約文に書き入れることで清の代表を説得するというで決着した⁽²⁸⁾。これがネルチンスク条約に先進的な自由往来・自由貿易の項目が入った経緯である。

ゴロヴィーンの大使日誌によれば、最初ロシア側は商人は大使や公使に同行させ、5 年ごとに清に入国させると控えめな要求をしていた。しかし清側が条約文に明記しなくてもロシア人には自由に貿易することを許すと答えたので、

(25) *PKO*, XVII, 2, pp. 532-533.

(26) *PKO*, XVII, 2, p. 538.

(27) 『清実録』康熙 27 年 5 月癸酉の条。

(28) *PKO*, XVII, 2, pp. 547, 556, 564, 570, 575-577.

それからは要求をエスカレートさせて、通行証を保持していればそれぞれの臣民は両国を自由に往来でき、売買することも自由であると改めたのである。これに対してジェルビヨンは、8月29日〔グレゴリオ暦、ユリウス暦では8月19日〕の条に、ロシアの使者が多くの変更をもつてやってきた。重要なものは3点あって、その第3番目が自由往来・自由貿易の要求であった。清側はそれを認めたが、国境の規定といっしょにするのは適当ではないと、条約に入れることには反対したという⁽²⁹⁾。なおジェルビヨンが、ここでロシア人の要求は最初から自由往来・自由貿易の内容だったというのは、ゴロヴィーンの記載とは異なる。

2 内陸部の国境線とその起源 ——ネルチンスク会議の後半

ここからは会議の後半である。8月23日にロシア側は第一次草案と呼ぶべきものを準備し、ペロポツコイらがそれを清側に伝達する。その第1項には次の如く述べる⁽³⁰⁾。

提案された国境について、ロシア皇帝陛下の全権大使は、もしも清皇帝陛下の大使が以下に挙げる条約の項目を実行するならば、かれらの使節の意向に従ってロシア皇帝陛下と清皇帝陛下の固い友情と好意のために、ゴルビツァ川とその水源である最初の「石」までを（国境とすることを）許す。…シルカ川の右岸（南岸）ではアルグン川河口からアルグン川上流の水源に向かって、右側（北側）の土地はロシア皇帝陛下の側に含まれ、左側（南側）は清皇帝陛下の側に含まれる。

この第一次草案では、会議の前半で合意した口清国境の西部分、すなわちアルグン川とゴルビツァ川については述べているが、東部分に関しては曖昧である。しかし後述する如く、ゴロヴィーンの大使日誌とジェルビヨンの手記に国境の東部分の記述が散見するので、両国がそれについて協議を行ない合意していたことは確実である。ロシアの第一次草案を聞いた清の代表は、最後に「ゴルビ

(29) Du Halde, *Description*, vol. 4, pp. 197-198.

(30) *PKO*, XVII, 2, p. 545.

ツァ川と…、シルカ川の右側（南岸）ではアルゲン川に沿って国境とするように。…ゴルビツァ川の水源からまっすぐ石まで、その左側（北岸）をロシア皇帝陛下の側に、アルゲン川の河口から上流に右側（北側）をロシア皇帝陛下の側におき、左側（南側）を清皇帝陛下の側に置くように」と発言をしている⁽³¹⁾。22日の条にも清が両国の国境は、ゴルビツァ川から「石」伝いに海まで続くといったことを記す⁽³²⁾。

翌24日にはイエズス会士とラシ⁽³³⁾が清の第一次草案を持ってロシア側を訪れ、その条文について説明した。ゴロヴィーンは内容を検討するので、この草案を置いていくようにいった。しばらく協議が続いて、それが終わるとイエズス会士は帰っていった⁽³⁴⁾。さて清の第一次草案には次の如く記されていた。

（第2項）タタル語でオルムと呼ばれるゴルナ川（チョルナヤ川）の近くにあり、ソノン川（シルカ川）に北側から流れこむケリビヒ（ゲルビチ）という支流または小川を、両国の間の境界と決める。また上述のケリビヒ川河口から始まって、高い山がソガリン=ウリヤ（サハリヤン=ウラ）とエナ=ウリヤ（レナ川）の間に列なり、東端は北東海に接するノス山まで続く。上掲の高い山の頂上を通り両国の領土を分ける。その山の南にあるすべての土地は、清国の領土とする。またその山の頂上から北にあるすべての土地はロシア国の主権下にあるものとする。

（第3項）上述したソノン川に南側から流れこむアルゲン川を境界と決める⁽³⁵⁾。

(31) *PKO*, XVII, 2, p. 549. 当時シベリアでは山脈を「石」と呼ぶことがあった。たとえばゼヤ川とウダ川の分水嶺を「石」と呼んでいる。*ДАИ*, том 11, СПб. 1869, No. 78, p. 218.

(32) *PKO*, XVII, 2, p. 542.

(33) ラシの職は理藩院員外郎にすぎないが、ロシアとの交渉を進める上で重要な役割を果たした。ラシはその後内閣侍読学士を経て内閣侍読、太僕寺卿まで昇進した。かれは康熙43年の河源調査によって歴史に名を残すラシとは別人であろう。*PKO*, XVII, 2, p. 328.

(34) *PKO*, XVII, 2, pp. 549-553.

(35) *PKO*, XVII, 2, p. 554.

つまり両国国境の東部分は、ゲルビチ川（ゴルビツァ川）の河口と源流から始まって、サハリヤン=ウラ（アムール川）とレナ川の間を通り北東海に入る、その末端はノス山に終わる山脈とする、その山脈の南は清領、北をロシア領とするという意味である。

この第一次草案で、清はそれまでの合意内容に新しい文言を付け加えた。すなわち東部の国境を形成する山脈が、海に入る直前の山をノス山と記したことである。ノス山もレナ川もそれまでの協議で一度も名前があがったことはなく、清の第一次草案で初めて現れた。ロシア側はこれに疑念をもち清側にノス山の意味を確かめることにした。

さてノス山とは何か。どこにあるのか。清はどうしてその名を知ったのか。ここで思い出すのは1676年に清に派遣されたロシアの大使スパファリーである。かれは旅行中に見聞したシベリアの地理に関して興味深い記述を残しており、その中には空想的、非現実的な物語も含まれる。そのひとつが、バイカル湖から始まりシベリアを横断して海まで達し、それからさらに海中遠くまで列なるといふ山脈の話であり、その山脈はレナ川とアムール川の水系を分かち、その端はカニノスあるいはソバチャと呼ばれた⁽³⁶⁾。この山脈はスパファリーのシベリア地図（1678年）に初めて現れて以来、シベリアで作製された他の地図に広がった。一般には「末端の知れない山脈」とか「迂回できない岬」と称され、「ノス（岬）」とか「スヴァトイ=ノス（聖なる岬）」と呼ぶこともあった。現在ではそれはチュコト半島（北緯65度付近）を指すと推定されている⁽³⁷⁾。スパファリーは北京でフェルビーストと面会しているので、この山脈のことはフェルビーストを通じて清の高官にも広まったのだろう。

(36) 井上紘一訳「スパタルス『大いなる河アムールの物語』」（共同研究『ロシアと日本』第2集、東京、1990年）、pp. 204-205、Н. Спафарий, *Путешествие через Сибирь до границ Китая*, Чита, 2009, p. 98.

(37) スヴァトイ=ノスの研究史とその位置に関しては、三上正利「スパファリーのシベリア地図」（『史淵』第99輯、1968年）第4を参照。なおスヴァトイ=ノスをカムチャツカ半島にあてる説もあるが、緯度が南に寄りすぎている。

ゴロヴィーンの大使日誌によれば、8月25日にゴロヴィーンは修正した条約草案とともにペロボツコイとヴァシリコフを送った。そしてふたりには、清の大使らに清の第一次草案にいうノス山がどこにあるのか地図において示させ、もしもそれがヤクーツクに近いスヴァトイ=ノスのことであったならば、条約草案を読まないで戻ってくるように指示した。

この日の協議で清の代表はペロボツコイらに、草案にノスを国境とするように記したのは事実であり、ノスは清領とすべきである、ただ清の地図にはノスは描かれていない、ノスはヤクーツクの方にあり海中遠くまで伸びるので、それを示す地図はないと返答した。そこでペロボツコイらは、

(清の)大使が(ロシアの)全権大使に地図で示した如く、ゴルビツァ川の水源からまっすぐ海まで達する山脈であり、その南の土地にある斜面と河川はその山脈からアムール川に流入し、その山脈の反対側では、その北の土地にある斜面と河川はロシア皇帝陛下の側に入る。ノスとレナ川に関しては説明しなかった。

と述べて、清の代表に「先日土地を画定した地図」を見せるように迫った。そこで清の代表は地図を広げて、ゴルビツァ川からその水源までと、山脈の上を通り地名が記されていない地点までをなぞったが、その山脈にはノスの名はなかったという⁽³⁸⁾。

これからみるとロシア側は会議の前半で、両国の国境はアムール川の分水嶺に決まったと理解していたことが分かる。清の地図に山脈がいくつ描かれていたのか不明であるが、ゴルビツァ川の水源から山脈が伸び、一方の先端は海まで達していたといい、清の代表もまたそれを指でなぞっているので、会議の前半にはその山脈を国境とすることで一致していたらしい。ジェルビヨンの手記をみても、8月26日〔ユリウス暦8月16日〕の条に清の大使がロシアの使いに対して、大人(Tagin)のひとりが持ってきた大きな地図を広げて、ケルベチ川(ゴルビツァ川)と、ケルベチ川の水源となっておりそこから東海まで列なる、アムール川の北側にある山脈を国境とし、それより南を清領、西と北を

(38) PKO, XVII, 2, p. 555-557.

ロシア領とすると説明したとい⁽³⁹⁾、アムール川の分水嶺を国境とすることがそれまでの合意であった。問題はそれがノス山かどうかであるが、清の代表が清の地図にはノスは描かれていないと証言しているので、その山脈はノス山ではない。そうとすれば清の代表はその地図とは無関係にノス山のことを持ち出して、それを国境とするといったことになるが、おそらく次に述べるロシアの地図を念頭に置いていたのだろう。

続いて清の代表がペロボツコイらに、「先日提示した」ロシアの地図をみせるようにいったので、ペロボツコイらはゴロヴィーンから預かった地図を広げて、「以前清の大使たちが貴族（ペロボツコイ）と書記（ヴェシリコフ）にまっすぐ海に至るその山脈を指さした通りに」、海まで列なるアムール川から最初の山脈を指さしたという。それに対して清の大使は、ロシアの地図を指さしながら次の如く反論した。

草案に記した如く、レナ川とアムール川の間であり、ヤクートの狩猟者がスヴァトイ=ノスと呼ぶ山脈を国境とするように。（もうひとつの）山脈は海まで達し、それから発する川はアムール川に注ぐ。それらの河川は昔から清皇帝殿下が領有する。その山脈の反対側（北側）にはウダ川やその他がある。それらの河川沿いには清皇帝殿下の、ロシア皇帝陛下ではない、納貢民が居住する。……それらの川や小川には一昨年、現在清の大使の同僚となっている清皇帝殿下の尚書が、先住民から貢物を徴収しに派遣された。……ノスまでにあるそれらの河川は昔から清皇帝殿下のものなので、（ロシアの）全権大使が何かをいう理由はない。……⁽⁴⁰⁾

それによると、ロシアの地図に描かれる山脈はふたつあって、一方の山脈は海まで達するアムール川の分水嶺であるのに対して、もう一方はそれより北にあるスヴァトイ=ノスと呼ばれるレナ川の分水嶺であった。清は后者を国境とすることを要求したのである。

ジェルビヨンの手記の9月1日の条をみると、両国の対立について次の如く

(39) Du Halde, *Description*, vol. 4, pp. 193.

(40) *PKO*, XVII, 2, pp. 557.

いう⁽⁴¹⁾。

モスクワの全権大使がわれわれの大使に対して、協議したことの無い問題が含まれた項目について説明を求めに人を送ってきた。というのは両帝国の境界は、ケルベチなる小河の源から北東に東北海まで伸びる、そしてその先端は海中に列なる山塊となっている山脈に定めると書かれているからだ。この山脈はノセ（ノス）と呼ばれる。注目すべきは、ケルベチの水源となっている山脈がふたつの高い岩の山脈からなり、そのひとつは大体まっすぐ東に伸びオノン川またはサガリエン=ウラ（黒龍江）とほとんど平行に走ることである。モスクワ人が両帝国の境界にしたいと提案したのはこちらであった。他の山脈は北東に向かって伸びており、わが方の人がとがその帝国の国境を置きたいと望むのはこれである。

ロシアの地図に関するジェルビヨンの記述は、ゴロヴィーンのものとは完全に一致する。それによると、ゴルビツァ川の水源から Y 字型ないしは V 字型の 2 列の山脈が伸びており、一方はアムール川と平行に東に向かって伸びるのに対して、東北方向に列なる他の山脈はノスと呼ばれ先端は海中に達する。ロシアは前者を国境というのに対して、清は後者を国境にすると要求して対立したという。

ジェルビヨンはさらに続けてふたつの山脈に挟まれた地域について述べる。

すなわちふたつの山脈の間には広大な土地が広がり多数の河川が流れる。中でも重要なのはウディ川（ウダ川）であり、その岸边にはモスクワ人が多くの入植地を開いている。最も価値のあるクロテンとクロキツネ、そして他の獣の毛皮がもたらされるのはこれらの地方においてである。同様にふたつの山脈の間にある海岸では、巨大な魚がとれる。その歯は象牙より美しくまた固い。タタル人たちはそれをとても珍重する。

このくだりはおそらくロシア側から出た話して、ベロポツコイが反論を行なう中で語ったエピソードであろう。文中の「巨大な魚」とはセイウチのことである。セイウチはベーリング海以北の北極海にしか生息せず、そのためにその牙

(41) Du Halde, *Description*, vol. 4, p. 198.

は稀少な交易品となっていた⁽⁴²⁾。シベリアのロシア人にとってスヴァトイ=ノスとセイウチはこのときはまだ謎の存在であり、どちらも北極海を連想させるものであった⁽⁴³⁾。実際ジェルビヨンはロシアの地図ではノス山脈が北緯 80 度の北極圏にあったと証言するし、ペレイラもノス山は北緯 75 度にありそれから北極点まで列なると述べる⁽⁴⁴⁾。ロシアの地図において山脈のひとつが北極圏に達したことは、これから明白である。

ここで注目したいのは、この地域を誰が領有するのかについて両国の間で主張が対立することである。前掲ゴロヴィーンの大使日誌によれば、清側はふたつの山脈の間を流れるウダ川の周辺は、清皇帝が領有しその辺民が居住すると主張するが、歴史的な事実には照らせばそれはまったくの偽りである。これまで清の勢力はこの地域に及んだことはない。これに対してウダ川の沿岸にロシア人が入植し、その地を占有していたことは事実である。清が根拠もないままその領有を主張したのに対して、ロシアはそれに事実をもって反論した。会議の後半で両国が対立したノス山問題の本質はここにある⁽⁴⁵⁾。

問題を整理するために、両国が会議で使用した地図を検討しよう。まず最初に清の地図に関しては、これまでイエズス会士が作製したとかロシアの地図から出たとかさまざまな説が現れたが、いずれも推測にしかすぎない⁽⁴⁶⁾。まして

(42) 菊池俊彦『環オホーツク海古代文化の研究』（札幌，2004年），第2部第3章を参照。

(43) 三上前掲論文，58と62頁を参照。

(44) Du Halde, *Description*, vol. 4, p. 199; Sebes, op. cit., p. 265.

(45) わたしはノスをめぐる対立がネルチンスク会議最大の難所であったと考える。それに対して吉田金一氏はそれをあまり深刻なものとはとらえず、わたしとは史料の読みが異なる。吉田『ロシアの東方進出とネルチンスク条約』（東京，1984年）258頁を参照。

(46) たとえばВ. С. Мясников, *Империя Цин и русское государство в XVII веке*, Москва, 1980, pp. 233-235; А. В. Постников, *История географического изучения и картографирования Сибири и Дальнего Востока в XVII-начале XX века в связи с формированием русско-китайской границы*, Москва, 2013, pp. 69-70; 吉田『ロシアと中国の東部国境をめぐる諸問題』（東京，1992年）第6.

それに描かれた山脈が何に由来するのか明確にした研究者はいなかった。わたしは満洲語檔案を調査している過程で、その中にそれと思われる記事を発見した。すなわち黒龍江將軍サプスがロシア人を掃討するために派遣した清軍が、康熙23年(1684)6月にトゥグル川の北で実見したアンバ=ヒンガン=ダバガン(amba hinggan dabagan, 大きなヒンガンの峠)がそれであると考ええる。

この年サプスはアムール川下流の左岸支流、アムゲン川に侵入したロシア人を討つために營長ヤングダイ以下618名を遣わした。かれらはアムゲン川を遡りニメレン川を経て、トゥグル川沿いのトゥグルスキー寨を攻略し47人を降伏させた⁽⁴⁷⁾。それからトゥグルスキーを脱出したものを追ってアンバ=ヒンガン=ダバガンまで行ったが、すでにウツコイ方面に逃げ去った後であった。清軍は追跡をあきらめてそこから引き返した。『黒龍江將軍衙門檔案』第1冊、康熙23年8月18日の条に、

黒龍江將軍・大臣サプスらが謹んで上奏する。……降伏したロシア人(loca)に、「あなた方の仲間が百人近くいたが、他のロシア人たちはどこにいるのか」と尋ねたら、「ガファリラ(ガヴリルコ=フロロフ)の仲間のロシア人50人近くはamba hinggan dabaganを越え東北海の方向、ヤクーツクを目指して行った」と述べた。……

という通りである。アムゲン川からトゥグル川をへてウダ川に向かう交易ルートは、この時代にはすでに存在していた⁽⁴⁸⁾。清軍を案内したガクダンガは、アムール川下流のクフン村に住むガシャインダであり、ふだんからその道を利用した商人とみられる⁽⁴⁹⁾。清軍はそのルート上を進軍したのであろう。アンバ=ヒンガン=ダバガンはトゥグル川とウダ川水系を分ける分水嶺であり、何かの境界であった。清軍がそれ以上ロシア人を追跡することをあきらめたのは、ア

(47) 注(6)に同じ。

(48) В. И. Огородников, *Из истории покорения Сибири. Покорение Юкагирской земли*, Чита, 1922, pp. 39-40.

(49) 『清実録』康熙23年正月乙酉、および『寧古塔副都統衙門檔案』(中国第一歴史檔案館所蔵)第6冊、康熙19年2月27日の条。ガシャインダは清がアムール地方の辺民に与えた地位で、第二位のもの。拙著、第7章を参照。

ンバ=ヒンガン=ダバガンが清の北限となっており、それよりも南を清の領土と考えていたからである。清の人びとが実見した山脈で国境としてふさわしいものは、それ以外には見当たらない。またネルチンスク条約の満洲語条文において、国境となった山脈を *amba hinggan i mudun*（アンバ=ヒンガンの尾根）と呼ぶことも、その名称が1684年の戦いに由来することを物語る。ジェルビヨンのいう清の「大人」は、おそらくサブスのことであろう。残念ながらこの地図の所在は不明である。また後述するように1690年の国境調査の際に、鑲藍旗蒙古都統バハイが国境碑を建てたウイエケン山は、この山脈の一部であったと推測される。

続いてペロポツコイらが清の代表に広げて見せたロシアの地図に移ろう。ポスニコフ氏はこの地図をレミョーゾフのシベリア地図（1687年）であったと考える。確かにその中では中央にY字型の山脈が列なり、東北に伸びる山脈の端にはスヴァトイ=ノスの名こそないが、それを想像させる書き込みが存在する⁽⁵⁰⁾。これに対して吉田氏は、問題の地図はスパファリーのシベリア地図であると主張する⁽⁵¹⁾。それにはスヴァトイ=ノスが存在するが、山脈はI字型で1列しか描かれずジェルビヨンの記述には合致しない。ポスニコフ氏に従うべきだろう。後述する「内大臣であったランタンなどが描いて持ち帰った九道の図」（通称「吉林九河図」）（1690年）が、レミョーゾフのシベリア地図と共通の構図をもつのは後者からそれを受け継いだからである。

清の地図にあった山脈とロシアの地図のそれでは、それぞれ異なる起源をもっている。それにもかかわらず両国の代表が会議の前半に一致点を見出した理由は、どのように考えられるであろうか。口清両国はともに、アムール川の本流については水源から河口までほぼ調査を終わっていたが、その北岸の内陸部に入ったことはほとんどなかった。「大人」の地図とレミョーゾフのシベ

(50) Постников, *op. cit.*, p. 70-72. レミョーゾフのシベリア地図は、А. В. Ефимов, *Атлас географических открытий в Сибири и в Северо-западной Америке XVII-XVIII вв.*, Москва, 1964. に含まれる複製地図（34）を参照。

(51) 吉田『ロシアと中国の東部国境をめぐる諸問題』第7を参照。スパファリーのシベリア地図は注（50）のエフィモフの地図帳にある複製地図（32）を見た。

リア地図は河川と山脈を描くだけの簡単な見取り図だったので、会議では必要な最低限の要求にしか応えられなかった。たまたまこれらの地図にはアムール川とウダ川の水系を分ける分水嶺が共通して描かれていたので、両国はそれを国境とすることで何とか一致することができた。しかし問題はその両端、とくに東端をどこに決めるかということであった。西端はゴルビツァ川（ゲルビチ川）の水源、東端はウダ川とトゥグル川の間という程度のおおざっぱな了解であったので、結局この曖昧さが会議後半における対立の原因となったのである。わたしはこのように考える。

話しを再び会議にもどそう。翌26日にゴロヴィーンは清の代表に使いを送り、次のようなラテン語の抗議書を届けた。会議の前半で清が提案した国境の案、すなわちアルゲン川、ゴルビツァ川、それからアムール川の分水嶺であり海まで達する「石」を両国の国境とすることは、ロシアには大きな損失であり、かつロシア皇帝が認めた範囲を越えるが、それにもかかわらず平和な関係を構築するために受け入れた。ところが清の条約草案ではその合意をかってに改めて、決まっていた「石」とは反対側のノスの「石」を国境とすることに変えてしまった。ノスはロシア皇帝の領土であるヤクーツク郡を広く含んでいる。その土地についてゴロヴィーンは皇帝の命令を受けておらず、国境を定める権限を持たない。かれが派遣された目的はアムール地方、とりわけアルバジン地区での争いを止めさせるためであった。もしも清側がこれを受け入れられないのであれば、適当なときまで会議を延期したい、と提案したのである⁽⁵²⁾。

ゴロヴィーンの送った抗議書は会議の流れに一石を投じることになった。ペレイラの手記によると、両国が第一次草案を準備したのが8月30日〔ユリウス暦8月20日〕で、清がそれを届けたのは翌日である。ペレイラは清の第一次草案のことを、「タタール人たちは前日に話したことにまったく留意しなかった」と論評する。9月1日〔8月22日〕にはロシア側が清の第一次草案にはいくつかの障害があり、最大のものがノスであると語ったという。翌2日〔8月23日〕にはロシア側が上記の抗議書を送ってきたことを述べて、その全

(52) *PKO*, XVII, 2, pp. 558-559.

文を引用する。そしてそれは真剣で分別があり、ロシア側が反対する合理的な理由がある、清の大使がこの問題で強硬なことを知り、ロシアは条約を締結するのをあきらめたのだらう、と記している。ペレイラは抗議書を清の大使らに翻訳して聞かせ、もし康熙帝が条約を締結できなかった責任が清側にあることを知ったならば、きっと不愉快に思うので、ここは協議を継続すべきであると説得した。大使たちもようやく状況を理解し、再度かれをロシア側に派遣した。ペレイラはゴロヴィーンと会見して、この抗議書がロシアの最終回答であると確信し、清側に帰ってそのことを報告した。その際にかれが清の大使らに対して、自らが要求する地域がいかなるものか分かっているか尋ねると、かれらはそれを知らなかった。さらにその間の緯度差を考えればほとんど八百レグアにもなると話すと、かれらは慌てたようすだった。清の大使たちは自らの提案がいかに深刻な内容を含むものか、まったく理解していなかった。その後清の大使らはペレイラらに、以前決めた通りにこの問題をまとめるように頼んだ、以上のように述べる⁵³⁾。

ジェルビヨンの手記においては、9月1日の記事はすでに引用した通りである。翌2日に清の大使はロシア側が回答を寄こさないことに困惑した。そして自らが命令以上の土地を要求したのが原因で、会議が暗礁に乗り上げたことを理解した。ジェルビヨンが北京からノスまでは直線距離にして千リウあるという、かれらはとても驚いて協議を再開するよういった。そのときロシア側がラテン語の抗議書を送ってきて、それはロシア側が望んだとおりの効果を表したという⁵⁴⁾。ただしジェルビヨンが3日〔8月24日〕の条に、清側がふたつの山脈に挟まれた土地については後日その帰属を決定すると提案をすると、ロシア側はそれに同意したというのは⁵⁵⁾、後述の如くかれの誤解である。

もしロシア側が求めるようにネルチンスク会議が流会になったら、失望するのはロシアも清も同じである。あるいは清の方がダメージが大きいかもしれな

53) Sebes, op. cit., pp. 265, 267, 269, 271.

54) Du Halde, *Description*, vol. 4, pp. 198-199.

55) Du Halde, *Description*, vol. 4, p. 200.

い。イエズス会士の手記から明らかになるのは、この危機に際してふたりが清の代表に懸命な説得工作を行なったことである。それによって何とか流会の事態は回避されたのであった。

ゴロヴィーンの大使日誌によると、この事態を打開すべくイエズス会士とラシがロシア側を訪ねてきた。ゴロヴィーンは3人に対して次の如く述べた。スヴァトイ=ノスは昔からロシアの一部でありヤクーツク寨に属す。清の臣民はそこに行ったことはなく、したがって両方の間で争いが起こったことはない。またスヴァトイ=ノスからウダ川の間で狩猟するのは、ロシアの臣民であり清の臣民ではない。スヴァトイ=ノスからウダ川までは歩いて10週間の距離であり、ウダ川からアムール川の分水嶺である、海まで達するもうひとつの山脈までは8週間かかる。ロシアはこれらの土地を譲ることはできない。しかしロシアの大使はその山脈の向こう側には行ったことはなく、皇帝陛下の指示もないので、交渉は適当なときまで延期したい、と。これに対してイエズス会士は、もしも境界の争いを静め国境を画定しないならば、平和をもたらすことはできないと反論した。この地域の国境画定をするしないという押し問答はそれからも続いたが、最後にゴロヴィーンが上述の土地を画定することができなくても、今後ロシアは以前の争いについて友好的に接し、平和条約を結べばそれを破壊することはしないと約束すると語った。そこでイエズス会士はゴロヴィーンに、上のことを草案にして清の大使に送るように語った⁽⁵⁶⁾。

8月26日にゴロヴィーンはペロボツコイらを送って、第二次草案を提出した。この中ではアルゲン川とゴルビツァ川、それからゴルビツァ川の水源から海まで伸びる「石の山」を国境として、その北側をロシア領、その南側にありアムール川に流入する河川の土地を清領と定める。ここまでは第一次草案の直後に清と協議した内容と同じである。そして両国が争ったオホーツク沿岸に関しては、「ロシア帝国の領土であるウダ川と清帝国の領土のアムール川、境界とされた山脈の間にあり海に注ぐその他の河川と件の河川の間」に存在するすべての土地は、今は決定しないでおく。それらの土地の分割について全権大使

(56) *PKO*, XVII, 2, pp. 561-562.

はロシア皇帝陛下から命令を受けていないので、他の適当なときまで決定せずに延期する」ことを提案した⁽⁵⁷⁾。表現が微妙でまぎらわしいが、ウダ川とアムール川の間であり海に注ぐ河川周辺の土地は今回は帰属を決めずに後日にするということである。しかしもしこの通りにすれば、清が現に領有するアムール川河口の北岸地域がその中に含まれる可能性がある。そこにはランガダ、ジャハダ、シスクイェなどの辺民村落が存在する。清の代表はこれを聞かぬや、清はゴルビツァ川から出るその山脈を国境とすることはできない、アムール川河口の向こう側にある多数の寨は清皇帝に属し、過去にはアムゲン川でアルバジンから来たロシア人といくたびも戦ったと反対した。それに対してペロボツコイは、ゴルビツァ川から海に至る山脈を国境として提案したのは、昨日来たイエズス会士がゴロヴィーンにそうするように勧めたからであると答えた。また清の大使が言及した、アムール川の河口近くでヤクートの狩猟者と清の臣民との間に起こった争いとその地方の分割に関しては、ロシアの大使はその決着を次の機会まで延期したいと語ったといった⁽⁵⁸⁾。

その日イエズス会士がロシア側を訪ねた。ゴロヴィーンはゴルビツァ川案の修正を試みて、アルゲン川河口の対岸にあり、アムール川に注ぐウルカ川を国境にしたいと語った。イエズス会士は、清側は清皇帝から命令を受けておらずこれ以上の譲歩はできないと断った。ゴロヴィーンはなおも続けて、これまでロシア側は多くの譲歩をしているので、清側も永遠の平和を思ってウルカ川を国境にするようにとねばったが、イエズス会士は受け入れなかった。最後にゴロヴィーンは、講和条約を仕上げるために清の大使と会見したいと申し出た。

ロシアはもう一度ヴァシリコフと通訳を送った。清の代表がゴルビツァ川から「石」を通してスヴァトイ=ノスに至るまでを国境にするようにいったので、ヴァシリコフは両国が争っているアムール川の河口に近い、ウダ川までの土地の画定は延期するように要求した。それに対して清の代表はイエズス会士を通して自ら意志を伝えるといったという。ついでイエズス会士とラシがロシア側

(57) *PKO*, XVII, 2, pp. 563-564.

(58) *PKO*, XVII, 2, p. 565.

を訪ねてきた。イエズス会士はロシア側が先日公表した如く、ゴルビツァ川と山脈を境界とし、ロシアの臣民はそれを越えない、またウダ川と近くの建物をロシア側に残す、さらにゴルビツァ川からまっすぐ海に至る（ノス以外の）山脈を国境とする、それらを条約文に記すというが、それは本当かと確認した。ゴロヴィーンはゴルビツァ川の水源から海まで至る山脈の存在について知らないで、それを国境とすることはできない、適当な時期まで決定を延期するように、と答えた⁽⁵⁹⁾。

その日清が第二次草案を提出した。国境に絞って内容を見ると、アルゲン川、ゴルビツァ川、それから泥灰石または「石の山」をへて、その頂上を通り海まで至る線で両国を分け、山の南側にありサガリヤン=ウラ（黒龍江）に注ぐ大小の河川を清の領土とし、その反対側にありレナ川に注ぐすべての土地と河川をロシアの領土とする、（その山と）ノス山までの中央にあり海に流入するその他の河川と間にあるすべての土地は、現在は帰属を決定しない、ロシアの全権大使がそれらの土地を知らないから、と述べている⁽⁶⁰⁾。

この条約草案によれば、ふたつの山脈に挟まれた地域全体が未画定地となって、ウダ川以北の広大な土地がその中に含まれてしまい、ロシアには大変な不利となる。ゴロヴィーンは次のように反論した。この地方にはヤクーツク郡に属す多数の寨が含まれており、ロシアはそれらの土地を決して手放さない、スヴァトイ=ノス周辺には多くの狩猟者がおり、ウダ川にはロシア皇帝の寨が多数作られている、これらの土地は昔からロシア皇帝の領土であった、そこでこれは次のように修正すべきである、すなわちアムール川河口とウダ川の間であり、その間にある土地と河川だけは決定しない、と。これに対してイエズス会士は、誰もノスがどこにあるか知らず、清の大使もノスから出る河川や斜面について知らないで、この草案では境界の土地の帰属は決定しないで後日に延期すると記した、と答えた。ゴロヴィーンは、ノス山ばかりでなく他の河川と斜面の多くもロシア皇帝に属する、ウダ川と他の多くの場所にはロシア皇帝の

(59) *PKO*, XVII, 2, pp. 567-569.

(60) *PKO*, XVII, 2, p. 571.

寨が築かれている，そもそもそれらの寨をどうして共有の土地に入れるのか，なぜそれらの場所を後日まで決定しないというのか，それらの場所はずねにロシア皇帝陛下に属している，と反論した。イエズス会士は，アムール川の河口にある山々の端には清皇帝の町が5か所作られている，もちろん清皇帝の命令に従って現在もそれを支配しており，そこに境界を定めなければならない，他方に言及した川と山，それにスヴャトイ=ノスも含めて，清の大使はこれらはロシア皇帝に属することを認めている，これでもって恒久の条約を結ぶように，と語った。ゴロヴィーンは，アムール川とウダ川の間にある河川と土地は画定しないと条約文には書くように，また適当なときまでこの問題を先延ばしするように，といった⁽⁶¹⁾。こうしてついに清は，スヴャトイ=ノスを含むウダ川以北の地がロシア領であることを承認した。残る問題はロシア側が，清がアムール川北岸に領有する土地の存在を認めるかどうかということだけになった。

8月27日にゴロヴィーンは最終の草案とともにベロボツコイらを清側に派遣した。それには国境に関して以下の如く記されていた。チョルナヤ川の近くにあり下流に向かって左側（北岸）からシルカ川に流入するゴルビツァ川を国境とする。またその水源から始まり海まで達する「石の山」により両国を分ける。その山の南からアムール川に注ぐすべての河川は清の領土に属し，その山の反対側に向かうすべての河川はロシア皇帝に属す。ロシアに属すウダ川と，清に属すアムール川に近い国境とされた山と川との間にあり，海に注ぐその他の河川と，ウダ川と国境の山の間にあるすべての土地は，現在は決定しないと。さらにアムール川に流入するアルゲン川を国境として，水源に向かって左側（南岸）は清に属し，右側（北岸）はロシアに属す，と⁽⁶²⁾。ロシアは利害の対立した内陸部の分割について，国境の山脈までのアムール川北岸地域が清に属すことを認めた。そしてウダ川とその山脈との間にある土地については，将来その帰属を決めることにした。要するに現在の支配地域をそのまま承認して，中間地帯の帰属問題はひとまず先送りしたのである。それから両国は最後のつ

(61) *PKO*, XVII, 2, pp. 572-573.

(62) *PKO*, XVII, 2, pp. 574-575.

めを行ない、8月29日にネルチンスク条約を締結調印した。

清の代表が起草した条約文（原文はラテン語、現代ロシア語訳からの重訳）は、次の通りである。

（第1項）タタル語でウルム川と呼ばれるチョルナ（チョルナヤ）川の近くに位置し、サガリエン=ウラに流れこむケルビチ川を両帝国の国境とする。また上述のケルビチ川の水源がありそこに始まる岩または石の山の頂上から、その山の頂上づたいに海までで、帝国の領土を分けて、その山の南側からサガリエン=ウラに流入するすべての土地と大小の河川は、清帝国の主権のもとにあり、その山の反対側から北に向かって広がるすべての土地と河川は、ロシア帝国の主権下にとどまるようにするが、ただしウダ川と国境に指定された山の頂上との中間にある海に注ぐ河川と土地は、当分の間決定しない。それらについての問題は、両帝国の大使が帰国した後入念に検討し精密に研究し、大使かあるいは文書を以て後に決定するものとする。

また上述のサガリエン=ウラに注ぐエルゴン川（アルゲン川）を国境と定めて、南側にあるすべての土地は清帝国に属し、北側にあるものはロシア帝国に属す。メイレルケ川の河口までの上述された川の南側にある建物は、みな北岸に移さなければならない⁽⁶³⁾。

なお満洲語文の方は「岩または石の山の頂上」を *wehe noho amba hinggan i mudun*（石ばかりのアンバ=ヒンガンの尾根）としている⁽⁶⁴⁾。

次にはロシアの全権大使が起草した条約文を引用するのが公平であるが、その所在が不明なので、ゴロヴィーンの大使日誌に記録されたロシア語訳の写しを検討することでそれに代える⁽⁶⁵⁾。それによると、

（第1項）チョルナヤ川の近くにあり下流に向かって左側（北岸）からシル

(63) *PKO*, XVII, 2, pp. 645-646. なお pp. 593-594 にはゴロヴィーン使節のロシア語訳文をのせる。内容はほぼ同一であるが、第1項を分割して「また上述のサガリエン=ウラ」以下を第2項とする点が異なる。

(64) *PKO*, XVII, 2, p. 652.

(65) *PKO*, XVII, 2, p. 583.

カ川に注ぐゴルビツァ川を両国の国境と定める。またその川の水源から、その川の水源から始まりその山の頂上づたいに海まで伸びる石の山により両国の領土を分け、この山の南側からアムール川に流入する大小の河川はすべて清国の主権のもとにあり、またその山の反対側から出るすべての河川は、ロシア国皇帝陛下の主権のもとにあることとする。ロシア国の主権下にあるウダ川と、清国の主権にあるアムール川の近くにある国境となる山との中間に存在し、海に注ぐその他の河川と、上述のウダ川と国境となる山との中間にあるすべての土地は現在は決めないでおく。なぜならばそれらの土地の分割について、全権大使は皇帝陛下の命令を受けておらず、両方の大使が帰国した後ロシア皇帝陛下と清皇帝陛下が、それについて友好の親書により大使か公使の派遣を希望する他の適当なときまで、決めないで延期するからである。そのときには勅書か大使により上述の未画定地を静かな適当な機会に静め画定できるだろう。

(第2項) またアムール川に流入するアルゲンという川を国境と定め、その水源に向かって左側(南側)にあるすべての土地は清皇帝の主権に属す。また右側(北側)のすべての土地はロシア国皇帝陛下の側に属すこととする。アルゲン川の南側にある建物はすべてその反対側に移す。

表現に微妙な差違はあるが、内容はまったく同じである。

3 ネルチンスク条約で定めた国境と両国の解釈

ネルチンスク条約に規定された口清両国の国境に関して、それと現実の地形とを比較しながら幾つかの問題点をあげ、両国の当事者たちがいかに理解していたかを論じてみたい。まず初めに国境の西部分について、ネルチンスク条約ではアルゲン川の北側をロシア領、南側を清領とし、南岸にあるアルゲンスキー寨の住民は北岸に立ち退かせることを決めたが、いったいアルゲン川の沿岸のどこまでを国境と決めたのであろうか。会議前半の8月22日にゴロヴィーンは、アルゲン川の水源であるダライ湖(フルン湖)とダライ湖に西南から流入するケルレン川までを両国の国境としたいと提案するが、結局その案

は採用されなかった⁽⁶⁶⁾。現代ロシアの学者は、アルゲン川の水源地（上流）まででダライ湖は含まれないと解釈するが⁽⁶⁷⁾、この定義では不十分である。同時代の人びとはアルゲン川とダライ湖はつながっており、後者を前者の水源地とみなしていたが、それは事実ではない。アルゲン川とダライ湖は一時的、季節的につながるだけで、アルゲン川の水源地は南からアルゲン川に注ぐハイラル川である⁽⁶⁸⁾。ネルチンスク条約で定めた国境が、アルゲン川に沿ってどの地点までであったかは条文からは明確ではない。1727年のブーラ条約においてはダライ湖の東、アルゲン川北岸のアバガイトゥより西の国境が画定されて、それぞれの国境はこのアバガイトゥでつながった。後考を俟ちたいと思う。

次にネルチンスク条約ではゲルビチ川（ゴルビツァ川）を国境に決めたが、当時この流域には同名の川がもうひとつ存在した。条約文にいうゲルビチ川（ゴルビツァ川）はどちらを指すのであろうか。ただしふたつのゲルビチ川が存在するのは清の地図においてであり、ロシアの地図では上流のゲルビチ川はゴルビツァ川というのに対して、下流のそれはアマザル川と呼ぶのがふつうである。

ひとつの手掛りは、条約文に「シルカ川に流入する」とか「サガリエン＝ウラに流入する」と特定することである。アムール川は長い河川であり流入する支流も多いので、上流では呼称が変わる。シルカ川はロシア人の間でしか使用しない呼称で、インゴダ川とオノン川との合流点から下流、アルゲン川との合流地点までをいう⁽⁶⁹⁾。ロシア人がアムール川と呼ぶのは、アルゲン川の河口より下流の部分である。同時期に作製された清の地図⁽⁷⁰⁾と現代の地図を見ると、上流のゲルビチ川（ゴルビツァ川）はアルゲン川の河口より上流すなわちシル

(66) *PKO*, XVII, 2, pp. 543-544.

(67) *PKO*, XVII, 2, p. 28; Мясников, *op. cit.*, pp. 247-248.

(68) 北満経済調査所『満蘇国境額爾古納河調査誌』（哈爾濱，1935年），3-4頁を参照。

(69) 井上前掲訳，202頁を参照。

(70) 一例をあげれば、「内大臣であったランタンなどが描いて持ち帰った九道の図」がある。吉田『ロシアの東方進出とネルチンスク条約』附図を参照。また国立故宫博物院『河嶽海疆』（台北，2012年）1-13はその原図である。

カ川に注ぐのに対して、下流のゲルビチ川（アマザル川）はアルゲン川の河口より下流つまりアムール川に注ぐ。ゴロヴィーンの大使日誌では上記のネルチンスク条約文の写しだけでなく、会議の途中で両国が提出した条約の草案も全部記録している。ロシアの第二次草案と最終の条約文（そして清の第一次草案も）には、ゴルビツァ川を「シルカ川に流入する」と特定しており、「アムール川に流入する」と記した例はない。したがってロシア側のいう「シルカ川に流入する」ゴルビツァ川が上流のそれであることは、議論の余地がない。それに対して清が作成した第二次草案と最終の条約文では「サハリヤン=ウラに流入する」と特定するが、清においてサハリヤン=ウラの名で呼ばれるのは、オノン川とインゴダ川の合流地点から下流である。清の命名法に従えばふたつのゲルビチ川はともにサハリヤン=ウラに注ぐことになり、清の条文からはどちらが国境なのか判別することはできない。

さて清の関係者はネルチンスク条約の締結直後には、みな上流のゲルビチ川（ゴルビツァ川）を国境と考えていた。たとえば会議の翌年（1690）清はロシアとの国境を調査、確認するためにアムール川北岸に調査隊を派遣した。このとき調査隊は9隊に分けられ、それぞれがアムール川左岸の支流を遡って国境となった分水嶺を目指した。そのうちの1隊は黒龍江（アイグン）を出発してゲルビチ川を遡り、その水源まで達した。その際に調査隊はゲルビチ川に国境碑を置いたが、その国境碑は康熙49年（1710）に上流のゲルビチ川の河口東岸に存在したことが確認されている⁽⁷¹⁾。清は上流のゲルビチ川を国境であると理解していた。清はこの解釈を一貫して主張し、後々まで変更することはなかった。

ロシアの見解も清と同じであった。レミョーゾフ『コログラフィー地図帳』に含まれるペイトンの地図と「自然境界入りのアムール川図」（1697年）、およびレミョーゾフ『シベリア地図帳』の「全シベリアの都市と土地の図」（1698年）では、ゴルビツァ川とアマザル川を並んで記し、ゴルビツァ川の傍らに「国境」という書き入れをする。ペイトンの地図は、ネルチンスク会議でロシ

(71) 拙著、第1章30頁を参照。

ア側が使用したといわれる地図のひとつである⁽⁷²⁾。さらに1724年にネルチンスクを経てダライ湖まで行ったメッサーシュミットも、その地図でシルカ川に注ぐゴルビツァ川を国境としている⁽⁷³⁾。また1726～27年に北京で清と国境交渉を行なったヴラジスラヴィッチは、ゴルビツァ川に関して議論を蒸し返すことはしなかった。それはすでに確定した事実だったからである。当時のロシア人が、ゴルビツァ川（上流のゲルビチ川）を国境とみなしていたことはまちがいない。

下流のゲルビチ川を国境と明記するのは、デュアルド『中国誌』（1735年パリ刊）に掲載されるダンヴィルの地図が唯一である。ダンヴィルがもとにしたのは、康熙帝に仕えたイエズス会士作製の『皇輿全覧図』（1718年）である。『中国誌』にあるダンヴィルの地図には全体図と部分図の2種類があって、後者は『皇輿全覧図』のコピーであるが、前者はダンヴィルが自らの信念に従ってそれを一部修正している⁽⁷⁴⁾。ここでダンヴィルの地図を見ると、かれは全体図（中国領タルタリア全体図）だけでなく部分図においても、下流のゲルビチ川（小ゲルビチ川）が両国の国境であると記すので、この場合はかれがイエズス会士に従ったまでもみえる。しかし『皇輿全覧図』でこれを確認すると、いずれの版にも該当の箇所には何も記されておらず、問題の注釈は『皇輿全覧図』から出たのではない。さらに1722年から清に滞在したイエズス会士のゴーベルは、口清の国境について次の如く説明する⁽⁷⁵⁾。

(72) Постников, *op. cit.*, pp. 72-73. レミョーゾフの地図帳は以下の複製本を参照した。L. Vagrow (ed.), *The Atlas of Siberia by Semyon U. Remezov*, The Hague, 1958; С. У. Ремезов, *Чертежная книга Сибири*, Москва, 2003. なおポスコフ氏はベイトンの地図に関して、ゴルビツァ川（上流のゲルビチ川）がアムール川に注ぐ点を問題視するが、これはベイトンの地図の単純な誤りである。その川下にはアマザル川があるからである。

(73) Постников, *op. cit.*, p. 82. なおМ. Г. Новлянская, *Даниил Готтлиб Мессершмидт*, Ленинград, 1970, p. 87の附図は写真が不鮮明で、それを確認できなかった。

(74) 拙稿「18世紀ヨーロッパにおけるエゾ論争の展開」（『清朝の「皇輿全覧図」作製とその世界史的な意義に関する研究』京都、2007年）8頁を参照。

(75) H. Cordier (ed.), *Mélanges géographiques et historiques*. Manuscrit inédit du

東海に注ぐトゥグル川の南にある、東海に突き出た山脈をみなさい。その山脈をたどり、大ケルビチという川の河口までいきなさい。その南にある地方は東海まで清の皇帝に属し、それ以北の地方は北海までロシア人のものである。……

ゴービルの参照した地図は『皇輿全覽図』であるので、かれのいう「大ケルビチ川」は、本稿でいう上流のゲルビチ川（ゴルビツァ川）のことである。以上からわたしはダンヴィルが下流のゲルビチ川（アマザル川）を両国の国境と注記したのは、かれの誤解であったと推測する。ネルチンスク会議で両国の代表が国境と考えたのは、上流のゲルビチ川（ゴルビツァ川）であったとして誤りない。

なおロシアの学者ミュラーは、第二次カムチャツカ探検の折ネルチンスクを訪れて、現地の住民から直接聞き取り調査したこと、およびダンヴィルの地図に記された注釈をもとに、ネルチンスク会議においては下流のゲルビチ川（アマザル川）を国境と考えていたが、清の大使が条約文を勝手に上流のゴルビツァ川に書き換えたと発表した（1757年）。かれの考えが公表されると、ロシアを中心に一定の支持をえたが、上述した通りこの説に信憑性はない⁷⁶⁾。

続いての問題点は、ゴルビツァ川の水源地から海まで伸びる山脈、ネルチンスク条約で「石の山」とかアンバ=ヒンガンと呼ぶものがどの位置を通り、東端はどこに達したかということである。こうした山脈を現実の地形と比較して、どれに該当するか特定することは困難である。スタノヴォイ山脈にあてる説、あるいはアムール川の分水嶺とみなす説など、さまざまな考えがあるが、すべての条件を満足させる山脈は実在しない。わたしは、清の代表がこの山脈を国境と主張するとき、かれらは1684年に清軍が到達したアンバ=ヒンガンのこと

↘ Père A. Gaubil S. J., *T'oung Pao*, 16, 1915, pp. 527-528.

(76) А. Р. Артемьев, О некоторых спорных вопросах пограничного размежевания между Россией и Китаем по Нерчинскому договору 1689 г. *Вестник Дальневосточного отделения РАН*, 2002, 1, pp. 19-21. また吉田氏がミュラー論文の前半を邦訳している。『ロシアと中国の東部国境をめぐる諸問題』36-43頁を参照。

を念頭に置いていたと考える。アンバ=ヒンガンは両国領土の中間にあって、国境とするにふさわしいからである。しかしそれがゴルビツァ川の水源から延々と海まで続いていることは、誰も確認したわけではなかった。ロシアはその存在に疑いをもちながらも、それを国境と認めざるをえなかった。

清ではゴルビツァ川から海岸に至る国境の山脈を、ネルチンスク会議の直後からアンバを省略してヒンガン (hinggan) とかヒンガンの尾根 (hinggan i mulu) と呼んだ。たとえば『黒龍江將軍衙門檔案』第 14 冊、康熙 29 年 3 月 15 日の条には鑲藍旗蒙古都統バハイのことばとして、

ロシアと協議して境界と定めたヒンガンなどの土地を調査しに、われわれを出発させる。

とある。さらに同書第 10 冊、同年 8 月 8 日の条には、兵部が

ヒンガンの尾根を境界と定めた問題を調査に行くのは、関わることに非常に重大なので、……

と述べる通りである。

清はネルチンスク条約を締結した翌年に、ロシアとの国境を確認し要所に国境碑を置くために、アムール川の北岸調査を実施した。この問題に関してはすでに論じたことがあるので本稿では繰り返さないが⁽⁷⁷⁾、それとは異なる視点から補正をしておきたい。このとき清は全部で 9 隊、約 450 名を左岸地域に派遣した。ネルチンスク条約によると、ヒンガンはアムール川支流の分水嶺であったので、清はその位置を確認する方法として、アムール川の各支流を遡り水源まで行くという最も確実な方法を選んだ。大部分の隊は分水嶺を遠くから実見するだけで終わったとみられるが、そのうちアムゲン川を遡ったバハイの率いた隊だけは、先年にヤングダイらが進軍したのと同じルートをたどり容易にヒンガンに達することができた。そしてヒンガンの一部であるウイエケン山（威伊克山）の峠道に国境碑を建設した。それは通行人が盛んに往来する道路の傍にあって、かれらが国境を越えないように監視するためだった。

このときの調査の成果は、「内大臣であったランタンなどが描いて持ち帰っ

(77) 拙著、第 1 章を参照。

た九道の図」として知られる。その中央部を東西に延びるのがヒンガンであり、ゼヤ川、ブレヤ川、ゴリエン川、アムグン川などアムール川北岸支流の分水嶺となっている。東寄りの海近くにはウイエケン山が描かれており⁽⁷⁸⁾、キルフィ川とトロン川（トロム川）がその付近から北に向かって流れ出している。ヒンガンの東端はそれらの河川の水源ということになる。

その後清ではウイエケン山の国境碑やウイエケン山に関して語られることは少なくなり、アンバ=ヒンガンの東端も曖昧となっていく。康熙 49 年（1710 年）に『大清一統志』を編纂していた際に、北京の大臣たちはトゥグル川を国境と考えていた⁽⁷⁹⁾。また 1726 年から翌年にかけて口清両国が北京で外交交渉を行なったときに、清の代表チャビナらは 1727 年 2 月 9 日に提出した修正案の第 7 条で、「あなたがたの民は国境を越えてヒンガン=トゥグリク（Химкон Тоугрик）と呼ばれる場所へ入る」と語っている⁽⁸⁰⁾。ヒンガン=トゥグリクとはヒンガンとトゥグル川を結合した表現であり、アンバ=ヒンガンのことである。チャビナらはそれをトゥグル川の近くと考えていたのだろう。さらに上記した如くゴービルはヒンガンがトゥグル川の南に伸びているとみていた。

清の国境となったアンバ=ヒンガンは、18 世紀前半になって「大興安山」、「石大興安」などと漢訳されるようになった。「大」はアンバの意識、「興安」はヒンガンの音訳である。ところがいったん漢訳されるとそれが一人歩きを始めて、18 世紀後半には「外興安嶺」という語が考え出され、19 世紀前半にはそれが清の漢文献で定着した⁽⁸¹⁾。「外」とはアムール川の北にあるとの意味であり、アムール川の南には「興安嶺」や「内興安嶺」という地名も現れた⁽⁸²⁾。

(78) 吉田氏前掲書、附図にはウイエケン川（uyeken bira）とあるが、誤読である。『河嶽海疆』1-13 図ではウイエケン山（uyeken alin）と読める。

(79) 『黒龍江將軍衙門檔案』第 294 冊、康熙 49 年 10 月 21 日の条。

(80) 拙稿「ヴラジスラヴィッチ 1726 年 北京」（下）（『アジア史学論集』第 9 号、2015 年）5 頁を参照。

(81) 『大清一統志』（乾隆 9 年）卷 30 盛京統部、および卷 36 黒龍江、同（乾隆 29 年）卷 37 盛京統部、および卷 48 黒龍江、西清『黒龍江外記』卷 1。

(82) 李兆洛『皇朝壹統輿地全図』（道光 22 年）、董祐誠（方立）『皇清地理図』（咸豊 6 年）、胡林翼『皇朝中外壹統輿図』（同治 2 年）などを参照。

アイゲン条約（1858年）により清がアムール川北岸を失うと、「外興安嶺」は使われなくなる。するとアムール川以南の地名にも変化が現れ、20世紀前半には「興安嶺」や「内興安嶺」に代わり、「大興安嶺」と「小興安嶺」の名称が現れた⁽⁸³⁾。

一方ロシア人は同じ山脈を「石の山」と呼んだ。1693年に北京に入ったロシアの使者、イズブラント=イデスは、「石の山」についてどのように考えていたのだろうか。かれが残した記録に次のように見える⁽⁸⁴⁾。

シベリアと清との間の境界。わたしは今アルゲン川と世界的な大河アムール川からゴルビツァ川に、記述の対象を移す。ゴルビツァ川はロシア皇帝陛下の領土と清皇帝の土地との間の境界である。ゴルビツァ川の河口とその東にあるものは、海に至るまでみな清の領域である。上述した川の西と北にあるものは、みなロシア皇帝陛下に所属する。今わたしはゴルビツァ川からアムール川の北に源を發し、東のかた中国大海あるいはアムール海に注ぐトゥグル川とウダ川までにある東の土地から始める。……

これだけではどこを国境としたのか不明確であるが、イデスの公使日誌の1694年4月9日の条に、ネルチンスク条約の第1条に関して「ウダ川とチャスティスカヤ山の間に入り境界を画定していない土地について、……」とあり⁽⁸⁵⁾、チャスティスカヤ山は「石の山」の一部とみられるので、イデスも清の国境はウダ川の南、トゥグル川の北にあるとみていたのである。

ネルチンスク条約が結ばれて以後、両国の貿易は大いに発展した。その一方で清はロシアとの間でまだ国境が画定されていないモンゴル方面と、ネルチンスク会議で帰属を先送りされたウダ川とアンバ=ヒンガンの中間地域について、速やかに決定することを求めた。ところがロシア政府はいっこうにそれに応じないので、清はロシアの隊商が北京に入ることを禁止しロシアに圧力をかけた。

(83) 例えば、陳鎬基『中国新興図』（上海、1915年再版）、丁文江等『中華民国新地圖』（上海、1934年）を参照。

(84) И. Идес и А. Бранд, *Записки о русском посольстве в Китай (1692-1695)*, Москва, 1967, p. 285.

(85) Ibid. p. 344.

ロシア政府はその解除を要求してヴラジスラヴィッチを北京に派遣して、その協議にあたらせた。出発前の1725年9月14日に外務省が交付した訓令の第26項には、ヴラジスラヴィッチが清入国前のシベリア滞在中に正確な情報を集めて地図を作製し、それをもって清との交渉に臨むことを指示している⁽⁸⁶⁾。ヴラジスラヴィッチはイルクーツクにいるとき、モンゴルとアムール川北岸に測量技師4人を派遣した。アムール川北岸の地図を作製しに派遣されたのはシャティロフとスヴィストゥノフで、かれらに対する指示は次のようなものだった。(要点)

- (1) まずネルチンスクに行って、「石の山脈」を通過してウダ川の水源地まで行ったことのある人を探しその道を尋ねること。
- (2) それからその道を通りウダ川水源地まで行くこと。それは北緯何度に始まるのか、ゴルビツァ川から海まで列なる山脈はあるのかなどを報告すること。
- (3) ウダ川水源地からウツコイ寨を通り海まで下ること。「石の山脈」からウダ川に注ぐ川の名、ウダ川水源地から河口までの距離を調べること。
- (4) ウツコイ寨に着いたらウダ川と「石の山」との間の距離、その間にあり海に注ぐ川の名を尋ねること。
- (5) 証言したウツコイ寨の管理人、住民には署名、確認付きの文書を提出させる。ウダ川と「石の山」との間にあるロシアの土地はどこまでか、ロシアの狩猟者はどこまで入るのか、他方清の臣民が狩猟に入るのはどこかなどを記すこと。
- (6) 「石の山脈」は海まで続くのか、それとアムール川の間にはどのような人びとが暮らすのか、かれらは山の北側に土地を所有するのか、ロシアの臣民との間に何か争いがあるのかなどを記録すること。
- (7) 以上の情報にもとづき実地に調査を行なって、緯度の入った地図を作製する。必要なことを地図に文字で記入すること。

(86) 拙稿「ヴラジスラヴィッチ 1726 年 北京」(上) (『アジア史学論集』第7号, 2014年) 13頁を参照。

そして最後に調査のときに絶対に清領に入ってはならないと注意している⁽⁸⁷⁾。これから明らかな如く、ロシア政府はウダ川の南には清の国境である「石の山」があり、その間を帰属が未定の土地と考えていた。

ヴラジスラヴィッチは以上の命令に対する回答を7月16日に受け取った。その中でスヴィストゥノフらは「石の山脈」を通してネルチンスクからウダ川まで行くことはできないし、その道を知るものもないと述べた。ヴラジスラヴィッチは、この問題は女帝には最も必要なことなので、すぐにイルクーツクを發ちヤクーツクまで行き、上記の命令を実行するように伝えた⁽⁸⁸⁾。スヴィストゥノフらはそれからウツコイ寨まで行って、現地の人びとに聞き取り調査を行なった。それに対する軍司令官、兵士、ヤサク納貢民の証言が、1726年12月30日～31日および1727年1月3日～9日付けでウツコイ寨から送られた。それによると、誰も「石の山(脈)」に行ったことがないし、その存在を知らなかった。またロシア領がどこまで続き、清領がどこから始まるかについてもみな答えられなかった。一部の兵士と住民がウダ川の上流とウダ川の河口から南に行ったことがあった。前者は、ウダ川の水源地ジェグディ山脈、上流のガラム川、シェヴレイ川、ゲルピカン川、チョガル川（いずれもウダ川の支流）などに行ったといい、そこはロシア領であり住民はクロテンの狩猟に行くという。一方後者に関しては、ウダ川を下って河口から海上をトロン川、トゥグル川、シャンタル島まで行ったものがいた。みな誰とも会わなかったといい、誰がそこを領有するのか知るものはいなかった。ただしトゥグル川がロシア領であると証言したヤサク納貢民も2、3人いた⁽⁸⁹⁾。以上からロシアの領域はウダ川流域までで、それから南には及んでいなかったことが分かる。

一般的にロシア政府はゴルピツァ川の水源地から海まで達するという「石の山」の存在に懐疑的であった。しかしネルチンスク条約を守り、ウダ川より南に立ち入ることを厳しく取り締まった。そのことにより清を刺激して貿易を停

(87) *PKO*, XVIII, 2, Москва, 1990, No. 144, pp. 306-309.

(88) *PKO*, XVIII, 2, No. 178, pp. 365-366.

(89) *PKO*, XVIII, 2, No. 204, pp. 477-482; No. 206, pp. 488-494.

滞させることを恐れたのである。雍正12年(1734)に上京したアムール川下流の辺民、ドゥワンセが清政府に対して、バハイが建てた国境碑が7、8年前に倒壊してから国境の警戒が緩み、近年はロシア人が清領に侵入して猟をしたり、辺民の罌からクロテンを横取りする事件が起きているので、これを禁止してほしいと要請した。同年12月に清はこのことをロシア政府に文書で伝えた⁽⁹⁰⁾。バハイの国境碑に関してロシア政府はまったくの初耳であった。そこでそのような標識があったのか、誰が、いつ、なぜ、どこに建てたのか、それは現在もあるのか、あるいはすでに撤去されたか、ロシア人は狩猟しにどこまで行くのかについて、地元の役人に調べさせた⁽⁹¹⁾。この後もロシアは、ネルチンスク条約に規定する国境を尊重する方針を変えなかった。その証拠に1844年にミッテンドルフがウツコイ寨で発見した帳簿には、18世紀に南の境界を侵犯して罰せられたロシア人の名前が記されていたという⁽⁹²⁾。

ロシアがそれまでの慎重な姿勢を変更して、国境に関する解釈を改めるのは19世紀半ばである。それは中央政府に批判的な個人の行動から始まった。まずミッテンドルフがアカデミーの許可を受けずに1844~45年にトゥグル川とゼヤ川流域を調査して、清の国境パトロールが残した目印⁽⁹³⁾を清の国境標識と誤って報告した⁽⁹⁴⁾。その結果ロシア人の間に、清が考えるロシアとの国境は実際よりも西に偏っているという誤解を生んだ。さらにネヴェリスコイもネルチ

(90) 中国第一歴史檔案館編『清代中俄関係檔案史料選編』第1編(北京, 1981年)第283号, 627-628頁。ドゥワンセについては、拙著, 第5章表8, 177-178頁を参照。

(91) Н. Бантыш-Каменский, *Дипломатическое собрание дел между Российским и Китайским государствами с 1619 по 1792-й год*, Казань, 1882, pp. 224-225. 返書は1736年11月18日に北京に届いた。

(92) Постников, *op. cit.*, p. 199.

(93) アムール川北岸の内陸部をパトロールし始めるのは、乾隆30年(1765)である(『清実録』乾隆30年8月癸亥の条)。このとき以来地元の八旗兵が1690年の調査と同じコースを定期的にパトロールしており、それは清末まで続いた。黒龍江省博物館他「清代官員巡查東北邊境的記錄」(『東北考古与歴史』創刊号, 1982年)を参照。

(94) Постников, *op. cit.*, pp. 200-202.

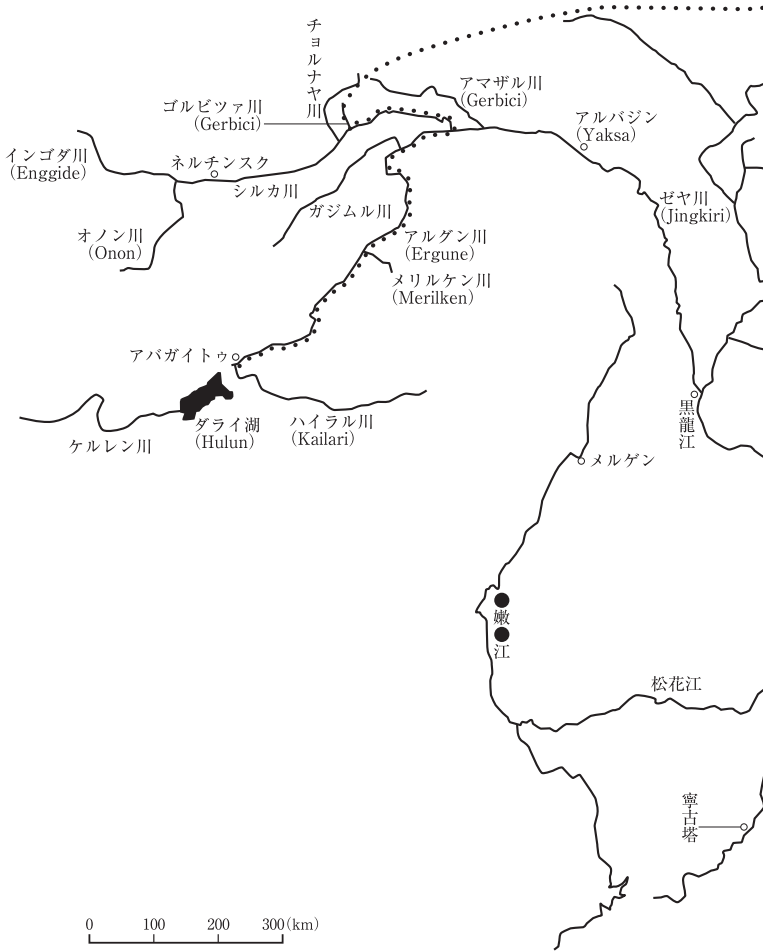
ンスク条約に関して、両国の国境の山脈はオホーツク海ではなくて、アムール川・松花江を横断し朝鮮半島北部の日本海に達すると独善的な解釈を展開した⁽⁹⁵⁾。かれの解釈はネルチンスク会議における上述の議論を完全に無視しており、ネルチンスク条約の誠実な研究とは無関係である。

お わ り に

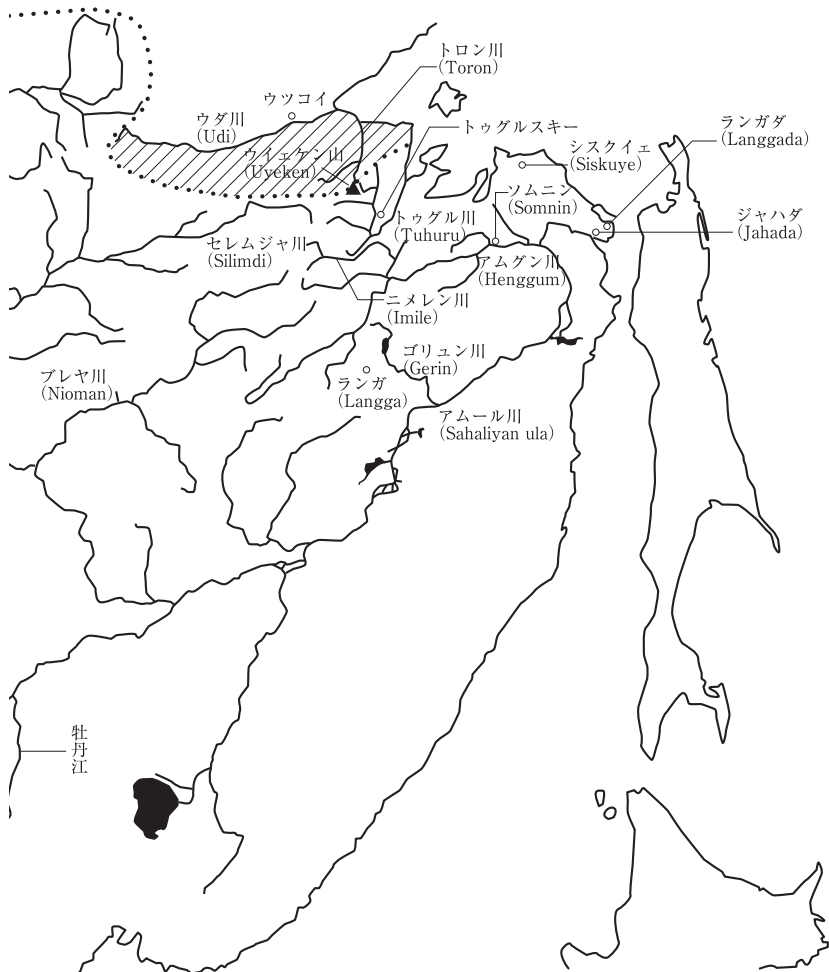
一般的に二国間の国境交渉は、現状にもとづいてそれを維持することが基本である。現状を少しでも変更しようとするならば、力によりそれを迫るか、相手に代償を与えることで取り引きするしかない。いずれにしても困難な交渉が伴うのである。

ネルチンスク会議における口清両国の国境交渉も、この例からもれない。二度にわたるアルバジン戦争の結果、アムール地方における両国の軍事力は拮抗し優劣はつかないことが明らかになった。その直後に始まったネルチンスク会議では、激しい議論の後国境が画定された。そのうちアルゲン川とアンバ=ヒンガンつまり「石の山」は、口清両国の勢力範囲の接点、またはその間を通過していた。これに対して戦場となったアルバジン地域については、清がその領有権を獲得したが、ロシアはその代償として自由往来・自由貿易の権利を清に認めさせた。それは近代的な国家間には普遍的にみられる関係であるが、中国の朝貢貿易とは異なる性質のものであった。そのために条約締結後に清がその条項の再修正をはかろうとしたことは、周知のとおりである。

(95) *Приамурье. Факты, цифры, наблюдения*, Москва, 1909, pp. 49-50.



- ネルチンスク条約（1689年）により決定されたロシアと清の国境
- ▨ ネルチンスク条約において帰属が決定できなかった土地
- ▲ 1690年に清が国境碑を建設した地点



アムール地方略図（17世紀末）（ ）内は満州語表記

AN ANALYSIS OF THE ‘ACCOUNT OF THE HISTORY OF BALHAE 渤海’ IN THE *RUIJŪKOKUSHI* 類聚國史

AKABAME Masayoshi

The *Ruijūkokuishi* is an encyclopedia, completed by Sugawara no Michizane in 892. The section dated the 25th day of the sexagenary cycle of the 4th month in the 15th year of the Enryaku era in the 193rd volume of the *Ruijūkokuishi* includes an account of the history of Balhae. It describes its founding and the local society of Balhae, providing a precious source for consideration of the domestic affairs in Balhae. Because the latter section describes the organization of the local administration and the ethnic composition of the local people, it has attracted much attention.

In regard to this account, local society and governance has been discussed through an examination of the character of the *shuryō* 首領, a title that appears in the text. However, the problem of how to think about the historical character of this account is an important prerequisite for any further discussion. As for this problem, there has been a consensus of opinion and there seemed to be no need for further discussion. Afterwards, there has been some consideration of the historical character of the account, albeit fragmentary in nature. This author thus thinks that it is necessary to reexamine this issue using a thoroughly empirical approach.

In this study, the author first reexamines the historical character of the account and then employs his findings as a key in interpreting the account, and finally concludes by offering some remarks on the circumstances of local society and its governance in Balhae.

THE NERCHINSK CONFERENCE IN 1689 : BORDER NEGOTIATIONS BETWEEN RUSSIA AND QING

MATSUURA Shigeru

In 1689 Russia and Qing concluded the Nerchinsk Treaty, demarcating the border of the Amur district between the two empires, and ending the warfare in this district that had continued for almost ten years. The border stipulated in the

Nerchinsk Treaty started from the upper course of the Argun' River in the west, and went eastwards along the Silka and Gorbitsa Rivers, and stretched from the headwaters of the Gorbitsa to the sea in the east, following the watersheds of the Amur River. The territory south of the border was to belong to Qing, and that to the north to Russia. Jurisdiction of the district between the mountainous border and the Uda River was not demarcated at that time, and the decision was postponed for future settlement. As regards the position of this border, there have been many different opinions, and they remain confused today. For example there are two Gorbitsa Rivers, and it is not clear which Gorbitsa River is being referred to in the Nerchinsk Treaty. Some people also insist that the sea to which the watersheds of the Amur reached is not the Okhotsk Sea, but the Japan Sea.

In this paper I carefully trace the border negotiations in the Nerchinsk conference, and especially clarify over which issues the delegates of two countries opposed one another, how they resolved them, and what problems arose from the agreements. The results of this study are as follows.

(1) The Gorbitsa stipulated in the Nerchinsk Treaty is the upper tributary that flows into the Silka. As a result, Russia lost Albazin and more than twenty villages, but as compensation took possession of a district to the north of the Argun', and furthermore obtained the rights of free passage and free commerce from Qing.

(2) As regards the inland district, both countries agreed that the border extended to the Okhotsk Sea at its eastern terminus. As a result, there was no change in the territory occupied by the two countries before the Nerchinsk conference, and border was demarcated midway between the two countries.

ON THE EDITORIAL PROCESS OF THE *BOHAIGUOZHICHANGBIAN* 渤海國志長編 BY JIN YUFU 金毓黻

FURUHATA Toru

The *Bohaiguozhichangbian*, which is famous as the first monograph on Bohai history in China, was written, edited and published by Jin Yufu in Manzhouguo 滿洲國. He started the writing and editing of the *Bohaiguozhichangbian* while he was confined due to the Manchurian Incident. After his release, he assumed the post of vice-director of the national Fengtian library of Manzhouguo, but exiled himself in Shanghai in 1936. In China, researchers of Bohai history recently highly appreciate